慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	今宮新著『初期日独通交史の研究』
Sub Title	S. Imamiya : German-Japanese relations, 1853-1870
Author	池井, 優(Ikei, Masaru)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1971
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.44, No.4 (1971. 4) ,p.146- 152
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19710415-0146

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

今宮　新著
『初期日独通交史の研究』

一

最初に本書が刊行されたいきさつについて触れたい。著者今宮教授は慶應義塾大学文学部史学科を大正一一年に卒業され予科教員時代にヨーロッパ留学の機会を得られた。専攻は国史であつたからヨーロッパでの研究テーマは「史学研究法」であつたという。しかし、幸田成友博士の日欧通交史の手法に共鳴を覚えた著者は、ベルリン郊外のダーレムにあるプロシャ古文書館に通い、幕末・維新期の日本関係の文書を漁つたのである。著者が古文書館で史料と取組んで居られた時あたかも一九三二年といえば、極東においては満州事変が拡大して居り当のドイツではナチスの抬頭が見られた際で、古文書館で史料を閲覧する日本からの歴史学者にも警察の目が光つていたり、旅行から帰ると文書の閲読を手伝つてくれていたドイツ人女性がやめてしまつているといつたことにも出合う。その折筆写したり、写真に撮つた資料は日本に持ち帰ることが出来たが、今宮教授ご自身が本来の専攻である「日本の内政史」研究へ回帰されたことと、学校行政への参加による多忙等でそれを生かすチャンスが得られず、史料は書斉の一隅のトランクの中に眠りそれを利用して寸暇を得た折に書かれた原稿も筐底に投げこまれたまま昭和三六年を迎える。昭和三六年は日独修好記念一〇〇年にあたり、記念式典、展覧会などが開催された。この催しに刺激された著者は、古い原稿を取り出し、それに手を入れて陽の目をあてさせることを決意する。その決意が今日このような形でわれわれの前に提示されるような書物の形になつたことをまずお慶びしたい。

二

本書の内容は次のようである。

全体は三編に分れ、第一編「序論」では、本書で取扱われる研究の範囲と研究資料の紹介がなされている。周知のように、日本とプロシアの国交は一八六〇年（万延元年）の日普修交通商条約締結によつて開始されるが、本書は一八五三年（嘉永六年）または一八五四年（安政元年）からスタートしている。その理由は、アメリカによる日本の開国が、プロシアのアジアへの関心を惹き、プロシャ政府内部にアジア諸国へ使節派遣を決意させたからであると著者は指摘する。そして本研究は、日本の開国の時期に始まり、幕末までをフォローするのであるが、本書ではそれを三期に区別する。すなわち、第一期、日本開国の時期、第二期、日普条約締結の時期、第三期、日本使節派遣の時期である。そして各々の時期の特徴として、第一期は、日米和親条約に続く、オランダ、ロシア、イギリスの対日和親条約の締結に

よつて、プロシャ政府が日本への関心を次第に高め、さらに一八五八年日本が列国と通商条約を締結すると、プロシャ政府は、アジア諸国特に日本、中国との条約締結の決意を確定的にする。すなわち日普通交の準備時代である。第二期は、一八五九年から同六一年の三年半に亙る時期であつて、プロシャ政府がオイレンブルグ伯を使節とする東亜諸国への派遣隊を編成して日本へ送り、日普修好通商条約を締結するすなわち両国国交の正式に開始された時期を扱つている。第三期は、一八六一年から二年にかけて、日本の遣欧使節が開市、開港延期のため、プロシャを訪問したことが、その中心課題となる。

研究資料の紹介では、日本における研究資料とドイツにおける研究資料にわけ、さらに日本の部については、一、外交文書を主とする資料、二、遣欧使節を中心とする資料、三、外国書の資料で翻訳されたもの、四、総合的研究による著作および論文、に分けて紹介がなされているが、前述したように、研究者の関心がドイツに関しては極めて薄いことがそこからもはつきりと解るのである。例えば、総合的研究による著作および論文中見るべきものは文部省維新史料編纂官であつた丸山国雄氏のものを除いてはほとんど見当らないといつてよい。またドイツにおける研究資料については、一、公刊書および雑誌論文、二、プロシャ古文書館貯蔵文書の順に紹介がなされ、著者が利用したプロシャ古文書館貯蔵文書については、先の研究範囲で示した三期に分けて、紹介と解説がなされている。

第二編「本編」は先にあげたように、三期に分けてそれぞれ第一章「我国の開国とプロシャの動向」、第二章「日普条約締結の研究」、第三章「プロシャにおける文久遣欧使節の研究」として展開されているが、それを順次紹介して問題点を探つていきたい。

まず第一章は、日米和親条結の締結とそれにプロシャがどう影響されたかから始まる。アメリカによる日本開国の知らせは、北欧の一国・プロシャ政府当局の関心を呼び起した。そして日米和親条約締結後半年目にあたる一八五四年八月、プロシャ外務省は、イギリス、フランス、ロシア各国の駐在使節に対し、日本とそれらの各国との関係、および条約締結について各国政府の意見を聴取し、また日本との条約締結は、プロシャにとって通商上の利益となりうるかどうか等の問題について報告を求め、また広東の領事に対しても日本条約とその運用について報告を求めている。本書では、ロンドン、ハーグ、およびボンの駐在使節からの報告について紹介がある。このようにしてプロシャ外務省は、日本との条約締結について協議を行い、英仏にくらべて不利な地位にあるプロシャとしては、アメリカを仲介として、日本との条約を締結しようと考えた。ただこの安政元年の時点で、プロシャが日本に対する使節派遣計画を放棄したのはプロシャ海軍力の勢力が極めて微弱であつたという理由によることが明らかにされている。一方当時ドイツ国内においては、イギリスの中国進出による刺激、またロシア経由で中国の市場に輸出されていたドイツ産品が、ロシアの積極的な東方進出によつて、その販路を断たれる情勢からこれを打開する必要が生じたことに加え、アジア諸国に居住して商業に従事しているドイツ人から、ド

イツの外交上の代表機関を設立せよというつき上げによつてプロシャ海軍が微弱で、使節派遣は一時的には中止せざるをえなかつたとはいえ、遠征計画自体は放棄されたのではなく、絶えずその実施を期して、プロシャが外務省を中心に対策をたてていたことがうかがわれるのである。ことにリュードルフと称するドイツの商人がアメリカの保護の下に東洋貿易に従事し、日本との通商を希望して、自らプロシャの代表と称して日本との和親通商開始を希望し、交渉したことが描かれている。このリュードルフなる人物については、田辺太一『幕末外交談』勝海舟『開国起源』にはプロシャ政府の内意を受けて来日した士官とされているが、今宮教授は、プロシャ側の日本関係文書類に、リュードルフおよび条約締結事件に言及したものが発見されず、かつ海軍当局の拒絶によつて使節派遣を中止していたという点から、リュードルフは、一介のドイツ商人にすぎないとしてその誤りを訂正している。

このように、対日使節派遣の機会を海軍の事情により延期していたプロシャにおいてはその後、バタビア領事等の対日貿易が有望であるとの報告、アジア諸国で活躍しているドイツ商人から対日貿易開拓の希望に加えて、アメリカがハリスの努力によつて日米通商条約を締結したとの報は従来の外務省に加え、商務省からも条約締結の希望を強烈に出させることになり遂に、その主張が軍令部を動かして使節派遣を実現させることになるのである。

第二章「日普条約締結の研究」ではプロシャ側が対日使節派遣をいかに準備したかについて使節の派遣決定とその変更、さらに出発に分けて詳述されている。特に準備にあたつては、日本の慣習等についての知識が極めて少なく、それについて日本との交流が長かつたオランダから、日本への贈り物にいたるまで何を持参すべきか問い合わせ、かつ情報を得ようとしたことが知られる。そして一八五九年八月中旬に至つて、遣日使節派遣は正式に決定し、それに使用すべき艦隊、使節およびその目的が具体化されたのである。特に遠征の目的を中国、日本、タイ諸国、およびハワイとの通商貿易条約の締結に限定すること、艦隊の航行もこの目的以上に出ないこと、が正式に決定されそれに沿つてその後数ヶ月にわたり、参加人員の選定、その他の準備が行われることになつた。しかし、ここで一つの問題が発生した。それは使節に予定されていたフォン・リヒトフォーヘン男爵が給与の問題にからんで使節を辞退し、オイレンブルグ伯爵がこれに代ることになつたことである。オイレンブルグはその後アメリカ駐在プロシャ大使を通じてアメリカからペリー来航の経験からペリーの遠征記、太平洋の危険地域地図、あるいは、日本沿岸の地図などを贈られるなど多くの援助をうけ着々と準備をととのえた。そして、総支出額三四万三六〇ターレルという巨額の費用を費してプロシャ極東遠征費にあて、いよいよ日本に出発することとなつたのである。

一八六〇年九月四日の夕刻、オイレンブルグ一行の搭乗したアルコーナ号はその姿を江戸湾に現わすが、その情景は使節の私信・日記等を使つて極めて迫力のある描写として再現されている。ただ極東遠征艦隊は大きな犠牲を払つたことが知られる、すなわち、派遣

した四隻の軍艦の一隻が日本到着の直前、九月夜の暴風雨によつて沈没するに到つたのである。はるばる行を共にした僚船と友人達をその目的地を目前にして失い、かつ前途には条約締結という難事業がひかえていたオイレンブルグ一行の暗澹たる心情を充分察しうると著者はのべている。さて、オイレンブルグの努力と、アメリカ公使ハリスの斡旋によつて当時不穏な日本の国内情勢をバックに五ケ月に渡る交渉が行なわれた結果、一八六一年一月日普修好通商条約、及び貿易商程が成立をみる。ただこの条約の交渉経過については本書は詳細にはのべておらず、この経過についてはプロシャ側の資料による研究が必要であるとの指摘がなされている。

第三章「プロシャにおける文久遣欧使節の研究」は、日本は、米、英、仏、露、蘭五国と条約を締結した後にプロシャとの条約締結を行うのであるが、この日米条約の締結は、新潟、兵庫、江戸、大坂の二都二港開港延期との交換条件によつて締結されたものであり、幕府は、その交渉のために使節を派遣することになつた。この竹内一行の遣欧使節については、東京大学の芳賀徹助教授による研究があるが（芳賀徹『大君の使節—幕末日本人の西欧体験』、中公新書、昭和四三年）、本章はプロシャとの関係にしぼつて描こうとしたものである。したがつてオイレンブルグからプロシャ政府宛に竹内一行が訪れるとの通告、それに対するプロシャ政府の準備、使節のベルリン訪問が詳細に描かれている。まず、プロシャ側としては、日本使節の来訪に先だつてすでに帰国していたオイレンブルグからの意見書によつて準備を整え、かつ日本使節が訪れる英、仏、オランダから接待礼儀書を取り寄せて準備を整えようとしたのである。そして、日本政府が先に立ち寄つたフランス、イギリス、オランダのドイツ外交官に命じて次々に報告を行なわせ、それらの国と遜色がないように努力したあとがおもしろいように描かれている。たとえばオランダからの報告によると、日本使節一行の食事については、「彼等はまつたくヨーロッパ風の食事をとり彼等の国で用いている箸の代りにナイフとフォークを用いている。ここで、毎日食卓に出される彼等の好物は生の魚肉である。彼らは自ら持参したソースをもつて食している。」あるいは喫煙について「彼らは特別の短いパイプで良いにおいのするタバコを吸う。ある者は欧州風のシガーをまつたく吸えない。オランダの婦人達もこの遠来の客がサロンでタバコを薫らすことを許している。少しでもタバコを吸うことができなければ彼らはただちに退室してしまうということである」とある。オランダ政府は日本使節の記念のため各々の役目および使命を日本語とオランダ語でかいた美しい印刷物を出版したが、それはハーグからベルリン宛に送られており、それに基づいて、プロシャの接待委員がこれに対する準備を整えている。さて、日本使節一行は無事ベルリンに到着し、プロシャ国王との謁見を行う。当時の模様も宮廷における使節一行の国王との謁見の図と共に詳細に描かれている。たとえば使節は日本語で挨拶を言上し、それが日本語通訳でオランダ語に訳され、それがさらにドイツ側の通訳によつてドイツ語に訳される、といつた手続きを経てこの謁見が行われたのである。そして日本側は、ベルリン覚書を外相との間に成立させることに成功した。日本

使節一行は、プロシャ側から大いに歓迎されて好印象をえてロシアに向かつたが、プロシャ側は日本使節がロシアの帰途再びたちよることは歓迎しなかつた。その理由は接待のめんどうさよりむしろ接待費の問題であつた。当時、苦しい台所から巨額の接待費を捻出することはプロシャにとつてかなり困難であり、これを一般国費、あるいは国庫特別費から支払うべきか、大使館の費用をもつて支払うべきか、一年間に亙つて問題になつているところからみても、当時のプロシャ財政にとつては日本からの遠来の客が必ずしも歓迎すべきものでなかつたことが知られるとの指摘がなされる。

第三編「結論」は明治維新とドイツの態度、明治開国とドイツ人の二章から成つているが、維新の混乱期にプロシャと北ドイツ連邦を代表して日本で活躍した公使、フォン・ブラントは当時冷静な中立的態度を終始とり、これを外交団に提案している、特に、鳥羽・伏見の一戦に破れ、慶喜が江戸に帰つた後の混乱状態にあつた際、ブラントが行つた厳正中立の提案は各国公使によつて正式には認められなかつたが、事実上において外交団の態度として承認されたのである。またドイツ人ゲルトナーなるものが一八六九年二月に北海道の函館郊外の土地三〇〇万坪を九九年間租借する契約を榎本武揚のいわゆる箱館政府と締結した点に関してもブラントは、自国民が関係した事件についてもきわめて公正な態度を持したのである。

第二章「明治開国とドイツ人」では、ドイツ人として鎖国から開国への我国の政治に参加した者の事跡についての紹介がある。すなわち、その代表的人物としてドイツ人としてのシーボルト父子の功績が紹介されている。以上によつて日独交通史については終るが本書の中でもう一つ注目すべきは付録として収録されている幾つかの論文とエッセイである。

付録として収録されているものは、大きく分けて幕末から維新にかけて日本に関係があつた外国人に関するものと本書の資料を筆者が若き日に蒐収したプロシャ古文書館に関するものである。

ここでは人物としては二人がとり上げられている。アレキサンダー・フォン・シーボルトとヘンリー・ヒュースケンがそれである。シーボルトについては、通交史の中でも最後に若干ふれられているが、ここでは、日本できわめて有名なフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトではなくて、その子、アレキサンダーの生涯について描かれている。日本におけるアレキサンダー・シーボルトの研究は、一八七〇年以降彼が日本政府に雇傭されたいわゆるお雇い外人として側面に焦点があてられているが、今宮教授はその少年時代から説きおこしている。一三歳になつた折、すでに六三歳の高齢をむかえていた父親と共にアレキサンダーは日本を訪ずれる。アレキサンダーは日本において日本語および漢字の勉強を課せられ、近くの寺の住職、あるいは、オランダ語ができる日本人から日本語の教授をうける、そして弱冠一五歳にして英国公使館に、勤務することになる、帰国する父親を送つた子アレキサンダーは、それが最後の別れとなるのも知らず、英国公使館の仕事に邁進するのである。初め充分でなかつた英語も一年後には完全に上達し、一六歳で通訳官および翻訳官に任命される。そして、かのアーネスト・サトーと共に薩

英戦争の際の要求文書の翻訳、通訳等に活躍するのである。このような激動期の外国における少年通訳官の役割がきわめて興味深く描かれ、その後一八六七年には徳川昭武のフランス派遣に同行し、日本使節の一行にあまりにも親しまれすぎたためフランス政府からの介添役との間に不和が生じ、それが日本人側とフランス人側との間に感情のもつれさえもたらすに致つたといつたことが丁寧にえがかれている。

同様な手法はハリスの通訳官として著名であるヘンリー・ヒュースケンの扱いについても同様である。「年若くして異境に非業の死をとげた一外人の生涯に同情を禁じえない」とする著者は、主としてプロシャ側の資料によつてヒュースケンの生涯と日本の浪士によつて惨殺される最後の事情を追求するのである。オランダのアムステルダムに生まれたヒュースケンは、家の没落によつて二〇歳前後に生活の活路を求めてアメリカに渡る。そこでハリスに見い出され、日本におもむくのである。当時、ハリスは五〇代、ヒュースケンは二〇代で親子ほども年も違つたが四年以上にわたつて未知な外国でほとんど二人だけで生活している間にハリス、ヒュースケンは親子のように親密になつたことが知られる。そして、陽気でのんきなヒュースケンは、母国語のオランダ語に加え、英、独、仏三ケ国語に通じていたため、他の外交団によつても重宝がられ、オイレンブルグの日記等にも度び度び登場してくる。ただ、ヒュースケンのそののん気な性格が治安が充分でない江戸市中を単独でしかも夜間に通行し、襲撃されるという悲劇をまねいたのである。政情不安定な外国の地にあつて活躍する若い通訳官の姿がここでも種々の資料によつて極めて鮮明にえがかれている。

付録のもう一つの柱はプロシャ古文書館についてである。ベルリンの西南ダーレムにあるプロシャ古文書館は第二次大戦後はソ連の支配下となり文書はまつたく散失してしまつたとのことであるが若き日に意気にもえて文書に読みふける今宮教授の姿が彷彿とされるエッセイである。

三

幕末・維新期における日本の対外関係の研究は、日本側史料のみならず、外国側史料の参照が必要であり、それによつて発展が期待されることは言を俟たない。戦前においては、フランス側の史料に基づく大塚武松教授のいくつかの論文があり、同教授没後出版された『幕末外交史の研究』（昭和二七年、宝文館）の中に収録されているが、戦後は、英仏両国の外務省文書を利用した石井孝教授の大著『明治維新の国際的環境』（昭和四一年、増訂版、吉川弘文館）アメリカの外交文書、新聞、雑誌史料を駆使した下村冨士男教授の『明治初年条約改正史の研究』（昭和三七年、吉川弘文館）などにその具体例が見られる。しかし、日本の開国が米国によつてなされたこと、その後南北戦争という国内的混乱のため、アメリカが対日外交から後退し、パークス、ロッシュに代表される英、仏勢力が対日外交の一線に躍り出たこと、また「北辺の脅威」として絶えず意識されて居たロシアは北方領土問題も直接関連してくること、などの理由から、以上の四国

については、研究者の関心も集っているが、その他の国となると、研究書としてまとまるまでに至ることは極めて少なかったといってよい。

今回刊行された今宮新名誉教授の『初期日独通交史の研究』は、第一にこれまで比較的関心が薄かった幕末、維新期における日本とプロシャの関係に焦点があてられている点、第二に今日では殆んど参照し得ないプロシャ古文書館所蔵文書を利用している点で、注目すべき研究である。

今宮教授は「本研究は日独交渉史の序論の一部をなすに過ぎない」とされるが、再び東西ドイツの文書を十分に利用して、この研究を土台にさらに日独通交史研究が発展することを希望して筆を置く。（B5版・三一五ページ・一四〇〇円・鹿島研究所出版会）

（池井　優）